

アーニー・パイル劇場の写真記録に関する基礎研究

—占領期の演劇空間と占領軍に向けた日本のステージ・ショウの検証—

串田 紀代美

はじめに

終戦直後の1945年12月24日、占領軍兵士専用娯楽施設の設置を目的として旧東京宝塚劇場が連合国最高司令部（General Headquarters, the Supreme Commander for the Allied Powers, 以下 GHQ）によって接収された。その後、約2ヶ月間の改修工事を経て、1946年2月24日にアーニー・パイル劇場として開館した。GHQの接収施設が集中した日比谷に位置し、GHQ本部（旧第一生命館）や東京PX（Tokyo Post Exchange）から近かったこともあり、多くの兵士とその家族が利用した。しかし日本人にとっては、立ち入り禁止の“オフリミット”空間であったことから、「幻の劇場」との異名のとおり、その実態は明らかにされてこなかった。

しかし近年、占領期における米国の対日文化外交政策への関心の高まりや戦後の日本美術に関する研究の急速な進展により、その実態が明らかになりつつある。特に桑原規子氏による調査研究は、アーニー・パイル劇場の美術展示や舞台美術の詳細、ひいては日米美術家の交流が行われていた事実を提示した^{1,2,3}。これらの研究成果から、アーニー・パイル劇場が単なる映画や演劇などに特化した接収娯楽施設にとどまらず、劇場内で幾度か現代美術展覧会を開催するなど日米文化交流の窓口としての機能を有していたことが分かってきた。また劇場内での公演ポスターやリーフレット制作といった広報関係の印刷物を宣伝する職務に、エルンスト・ハッカー（Ernst Hacker）とフランク・シャーマン（Frank E. Sherman）が従事していたことも明らかにされた⁴。

一方、劇場の主体である演劇空間に関する調査研究は、美術分野の研究成果と比較するとその進展がみられない。アーニー・パイル劇場の舞台上演に関する録画や録音資料、公演パンフレット、台本、楽譜など一連の資料がまとまって保存されておらず、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館（以下、演博）に収蔵されている本劇場関連資料の中でも、舞台公演の様子を伝えるはずの写真資料は、2014年11月から現在に至るまで閲覧そのものを禁じられている状況である⁵。そこで、当時の劇場や舞台公演の状況を知る手がかりとなる写真記録を入手すべく、米国国立公文書館（National Archives and Records Administration、以下 NARA）収蔵の占領期に関する資料のうち、映像・音声資料（non-textual records）の調査を行った。

本稿は、これまで日本劇場史の空白とされてきたアーニー・パイル劇場という演劇空間の歴史的検証の第一歩として、主に NARA が収蔵する占領期日本関連資料の中の写真記録や、当時の新聞雑誌などの文字資料を手がかりに、舞台公演の輪郭を浮き彫りにすることを目的とする。特に1946年から1948年にかけて日本人スタッフの手により製作され、日本人専属舞踊団「アー

ニー・パイル・ダンシングチーム」が活躍した舞台公演演目を中心に取り上げる。

1. 日米のアーニー・パイル劇場に関する写真資料

1-1 日本国内の主な写真資料

NARA の占領期日本関連写真資料の詳細について述べる前に、まずは日本国内に存在するアーニー・パイル劇場に関する資料について触れておく。

演博が収蔵する本劇場の舞台写真などは、アーニー・パイル劇場芸能顧問の一人であった伊藤道郎の資料の一部に含まれる。伊藤道郎の略歴については後述するが、アーニー・パイル劇場の日本側スタッフによる舞台製作の総監督であったことから、日本側スタッフが製作した舞台興行を軌道に乗せる際に重責を担った人物であったことは明白である。演博の伊藤道郎関連資料は、「千田是也文庫」の一部として演博が収蔵している⁶。これらの資料は実弟の千田是也が開設した俳優座の所蔵であったが、現在は伊藤熹朔の関連資料とともに「千田是也文庫」として演博に収蔵されている。

筆者が演博における2014年の調査で確認することのできたアーニー・パイル劇場に関する写真資料は、約100枚であった⁷。そのうち、アーニー・パイル劇場外観（図1）、エントランス（図2）、図書室（図3）、劇場客席、劇場練習室の写真や劇場関連の行事と思われるものなども含まれていた。劇場関係者との宴席での写真や劇場関連の兵士と思われる肖像写真などは除外したが、それ以外の多くは日本側製作スタッフによる舞台公演のリハーサルおよび上演に関する写真であった。舞台背景や出演者の衣装などに加え、各写真の裏面に英文で記載された公演や演出家、脚本家、俳優などの情報により、これらの写真の幾つかが日本側製作の公演演目のうち「ファンタジー・ジャポニカ」、「フェスティバル」、「ミカド」、「ジャングル・ドラム」、「タバスコ」、「ラブソディー・イン・ブルー」、「スリー・グレート・ワルツ」、「スノー・クイーン・ファンタジー」の舞台公演であることが特定された⁸。

1-2 米国の写真資料と日米写真資料の比較

米国に存在するアーニー・パイル劇場に関連する写真記録は、NARA（米国国立公文書館）の占領期日本関連資料の一部として収蔵されている。そして占領期日本関係資料は、米国の連邦政府の組織によって分類されている⁹。今回調査した資料は、「RG111 “Records of the Office of the Chief Signal Officer”, Photographs: Signal Corps U.S. ARMY, Photographs of American Activity, 1900-1981」に収められたものであった。

資料名「RG111 “Records of the Office of the Chief Signal Officer”」のうち、RG（Record Group）は記録群、111という番号は陸軍通信局長室記録群を示す。各写真にはそれぞれ番号が付与されており、本稿で取り上げるアーニー・パイル劇場関連の写真記録はすべてSCではじまる番号が付けられている。たとえばRG111-SCは、米陸軍通信局が撮影した写真を意味している¹⁰。

NARA の写真記録は、占領期の各国の写真が未整理の状態で保管されている。その膨大な数の資料の中から、今回の調査ではアーニー・パイル劇場に関連する写真を発見し撮影した¹¹。

現段階で筆者が確認できたアーニー・パイル劇場の写真資料は、前述した演博およびNARA

の2種類である。そこで両者の写真資料を比較した結果、以下のことが明らかになった。

- ・NARA が収蔵するアーニー・パイル劇場関連の写真記録は、米陸軍通信局が撮影した写真記録であることを示す「SC」で始まる番号が付与されている
- ・NARA 収蔵の写真裏面には、撮影年月日や撮影者名とともに撮影内容が英文で記載されている
- ・NARA と演博の両機関が収蔵する舞台公演の写真の多くは一致しない
- ・演博が収蔵するアーニー・パイル劇場関連の写真資料は、粘着式アルバムの台紙に貼られ、透明フィルムに覆われているが経年劣化しており、一部の写真は裏面の英文記載情報が読み取れ、NARA 収蔵の写真裏面に記載された情報の書式に酷似することが判明した
- ・演博の写真裏面には、NARA 所蔵の写真記録と同様「SC」で始まる番号と撮影情報が英文で記載されており、米陸軍通信局が撮影した NARA の写真記録と同類である可能性が非常に高い
- ・両機関が収蔵する舞台公演関連の写真資料は、1946年から1948年までの期間に集中している
- ・アーニー・パイル劇場の日本側スタッフが製作した舞台公演写真の総数は演博が圧倒的に多い
- ・演博の写真は伊藤道郎の写真アルバムにあり、劇場写真の特定が難しいものも含まれる
- ・演博の写真には、日米の劇場関係者との撮影写真や劇場関係者の肖像写真が含まれる
- ・NARA 収蔵の写真資料は、米国から来日した実演団体が出演した公演写真が多い
- ・米陸軍通信局が撮影した「SC」で始まる番号を持つ記録写真の裏面には、撮影年月日、撮影場所、撮影者名のほかに、舞台公演の演出家名、脚本家名、俳優名のほか、軍関係者の場合は階級、本国居住地などが詳しく記載されている

以上、両機関が持つアーニー・パイル劇場関連の写真資料を比較し、その特徴を分析した結果、演博が収蔵する写真資料はもともと伊藤道郎所有の写真アルバムにあったことから、伊藤道郎および日本側製作スタッフによる公演演目に関する写真が非常に多いことが明らかになった。一方、NARA が収蔵する写真記録は、連合国軍側スタッフが米国から招聘した実演家団体の舞台公演に関わるものが多く、両機関が収蔵する写真資料の中で一致する写真は非常に少ないことも分かった。今後、演博にある伊藤道郎関連資料のアーニー・パイル劇場関係資料がデジタル・アーカイブコレクション「伊藤道郎関連資料データベース」で資料公開され、当該写真資料が裏面記載事項も含めて閲覧可能となれば、演博収蔵の写真が NARA 収蔵の写真記録と同種のものであることがさらに確信できよう。

2. アーニー・パイル劇場の概観と専属舞踊団

2-1 複合文化施設としてのアーニー・パイル劇場

「東洋一の大劇場」と謳われた鉄筋5階建ての東京宝塚劇場は、アーニー・パイル劇場として生まれ変わり、1946年2月24日から1955年1月の接收解除までのおよそ9年間にわたり、数多くの映画上映や舞台上演が行われた。1階から3階までが大劇場で3000人収容可能な客席を備え、

観客席背部の広間には絵画、人形、生花などの陳列室になっていた¹²。大劇場のほか、2階には800名の収容が可能な映画上映のためのニュース上映シアターもあった。そして3階廊下には展覧会場があり、「日本の最高美術工芸品を逐次展覧、好評を受け」たという¹³。また4階には20,000冊を所蔵した図書室（図3）およびレコード音楽室が併設された。一方、地下には東京PXのスナック・バー（図4）、屋上（図5）では夏期のみ喫茶店（ビア・ガーデン）で軽音楽（バンド）の生演奏を楽しむこともできた¹⁴。

大劇場では米国の最新映画を公開し、2、3日で新たな映画が上映された。昼間の映画上映に加え、夜間興行は映画のほかにステージ・ショウも上演した。後述する日本側スタッフによる「日本物ショウ」は夜間上演のための興行演目であり、劇場は約一週間でそれらを新たな上演演目と入れ替える興行形態をとっていた。

このようにオフリミット空間でありながら、一時期は600人を超える日本人従業員がおり、ミュージカルやジャズの本場米国の実演を直に体験できることから、外部の日本人も密かに出入りしていたという¹⁵。

連合軍側の劇場総支配人ロバート・バーガーとともに日本人側支配人の結城雄次郎を支える副支配人を一時期務めた久我進は、アーニー・パイル劇場での公演が日米の演出家や振付家の協力のもとで次々と成功をおさめ、当時のアーニー・パイル・ダンシングチームを主軸とした日本人によるステージ・ショウの上演レベルの高さについて『九州演劇』誌上で記述している¹⁶。事実、伊藤道郎が構成演出を担当した「ジャングル・ドラム」は「日本一」と評され、米国人振付師による斬新な振り付けの南米レビュー「タバスコ」も好評を博し、その後アーニー・パイル劇場を出て日本劇場でも上演されている。

戦後の復興もままならない終戦直後に接収された劇場で、本場アメリカのステージ・ショウをも圧倒した、日本人による「アーニー・パイル・ダンシングチーム」とは、いったいどのような舞踊団なのであろうか。そして米国から直接招聘されるプロの実演家集団によるミュージカルやレビュー公演の中で、日本側スタッフはどのような作品を次々と生み出したのであろうか。

2-2 アーニー・パイル劇場の興行形態

アーニー・パイル劇場での舞台興行は多岐にわたり、ミュージカル、オペラ、ドラマ、レビュー、ヴァラエティ、ボードビルなど様々なステージ・ショウが毎夜繰り広げられていた。

大劇場の舞台で上演される興行には、主に3つの形態があった。まず一つ目は、米国から招聘されたプロの俳優達による演劇やステージ・ショウの上演である。「Soldier Show Production」という組織が興行を引き受け、本格的な舞台公演が楽しめた。1946年8月12日に上演された話題性のある喜歌劇「ミカド」¹⁷（図8～12）は、著名な俳優陣に加えオペラ界のベテランが顔を揃え、観客の兵士たちを喜ばせた¹⁸。ちなみにこの「ミカド」上演は日本人の間でも話題を呼び、読売新聞社提供の「ミカド」の舞台写真が、当時発刊されたばかりの雑誌に掲載された¹⁹。

二つ目は移動演劇団体「USO Camp Show」によるミュージカルやステージ・ショウである。USO（United Service Organizations Inc.）とは民間非営利団体の米軍慰問団のことで、主に米軍基地内などで開催する音楽やイベントなどエンターテインメント・プログラムを世界中に向けて提供している。たとえば、1946年2月24日の劇場開館時に上演された「ガーシェインに捧ぐ」（“Salute

to Gershwin”)は、USO によるものであった。これらのステージ・ショウ上演の合間に、進駐軍各隊の吹奏楽団や軽音楽団が演奏されることもある。

そして三つ目が、日本側スタッフによって製作された「日本物」ショウである²⁰。その中心的存在が専属舞踊団「アーニー・パイル・ダンシングチーム」である。

2-3 アーニー・パイル・ダンシングチーム設立と伊藤道郎

劇場専属舞踊団は1946年3月に新聞広告を通じて募集された²¹。その結果、女性60名、男性15名を採用した。舞踊の経験者もいたがその多くは初心者で、男性はほとんどが復員兵であったという²²。舞踊団は猛練習を重ね、1946年3月「ファンタジー・ジャポニカ」で初舞台を踏む。こうして専属舞踊団「アーニー・パイル・ダンシングチーム」は誕生した。そして舞踊団設立当初から指導育成に携わり、舞台出演まで導いたのが伊藤道郎である。

伊藤道郎は、専属舞踊団の育成指導と同様、「日本物ショウ」の製作にも重責を担っていた。伊藤は劇場開館直後、1946年3月に雇用されている²³。1912年に19歳でドイツへ渡り、イギリス滞在を経て1916年渡米した伊藤道郎は、その後27年間にも及ぶ米国滞在中、ニューヨークやカリフォルニアで舞踊家、振付師、演出家、舞踊学校教師などを経験した。こうした輝かしい経歴が占領軍側に高く評価され、アーニー・パイル劇場の芸能顧問兼総監督として雇用されるに至ったのである。劇場の顧問としては、伊藤道郎のほかに実弟の伊藤熹朔（舞台装置）、宇津秀男（演出）、紙恭輔（指揮・作曲）、普門暁（美術）などが顔を揃えていた。

実は劇場関係者の米軍将校の中に、かつての伊藤道郎が米国で設立した舞踊学校の教え子がいたとも言われている。彼との再会があったおかげで「私の計画もスムーズに進んで、アーニー・パイル専属の舞踊団を作り上げる事が出来た」と伊藤自身も述懐している²⁴。

だが、専属舞踊団と伊藤道郎が本劇場で正式に活躍した時期は短い。その時期は、前述の写真資料が集中的に撮影された1946年から1948年までの時期と一致する。

3. NARA 所蔵アーニー・パイル劇場の写真記録の分析

3-1 「アーニー・パイル・ダンシングチーム」と主な公演一覧（1946-1948）

ここで、アーニー・パイル劇場で上演された「日本物」ショウのうち、本稿の冒頭で紹介した写真に撮影された主な公演演目を整理してみたい。

表1 1946年から1948年までの「日本物ショウ」公演演目一覧

公演時期	出典	公演名・構成演出・装置など
1946年2月あるいは3月	青木（2013：101）※1 緒崎（1948：15）	第1回「ファンタジー・ジャポニカ」（日本の幻想）
1946年8月12日	久我（1947：7）	「ミカド」
1946年10月2～6日	S&S ※2（1946.9.27）	第1回単独公演「フェスティバル」
1946年11月	緒崎（1948：15）	「ジャングル・ドラム」レビュー、構成演出（伊藤道郎）

1946年12月6～16日	橋本（1997：90）※3	第2回単独公演「ジャングル・ドラム」レビュー、構成演出（佐谷功）、日本劇場にて上演
1947年2月24日前後	NARA	「タバスコ」演出（伊藤道郎）
1947年2月	俳優座（2014：341）	「ブギビーツ」構成演出（伊藤道郎）
1947年3月	藤田（1992：163）	「椰子のそよ風」構成演出（宇津秀男、三橋蓮子）
1947年4月25日前後	NARA	「サクラ・フラワーズ」演出（青山圭男、三橋蓮子）
1947年5月	藤田（1992：167）	「アーニエット南に行く」構成演出（宇津秀男）
1947年5月25～28日	NARA	「スリー・グレート・ワルツ」演出（伊藤道郎）
1947年8月12日前後	NARA	「ラブソディー・イン・ブルー」演出（伊藤道郎）、演出（ジョー・ステイブンスン）
1947年8月	藤田（1992：168）	「海底」構成演出（伊藤道郎）
1948年2月19～29日	橋本（1997：101） 伊藤熹朔※4（1963）	「タバスコ」「ブギ・ビーツ」（アーニー・パイル・ショウ）構成振付（伊藤道郎）、演出振付（宇津秀男）、振付（三橋蓮子）、装置・衣装（伊藤熹朔）、日劇にて上演
1948年8月	藤田（1992：161）	「椰子のそよ風」演出（宇津秀男、三橋蓮子）

※1 青木深『めぐりあうものたちの群像』大月書店。

※2 S&Sは「星条旗新聞」（Stars and Stripes）の省略である。

※3 橋本与志夫『日劇レビュー史』三一書房。

※4 伊藤熹朔『伊藤熹朔舞台美術』朝日新聞社の巻末一覧表を参照した。

本稿において写真を掲載したものは、表1にゴシック体で記述した。紙幅の都合上、ここでは個々の写真について詳細に分析することはしないが、伊藤道郎による演出・振付の演目には、さまざまな要素が見え隠れする。その特徴の一つとして、伊藤道郎が西洋中心主義的な「他者」の視点から東洋や日本をまなざし、東洋趣味に彩られたエキゾチックなモチーフを伊藤自身が再構築したセルフ・オリエンタリズム的な「日本イメージ」の表象が挙げられる。「ミカド」や「サクラ・フラワーズ」にみられる伝統的な日本を象った種々の題材や要素を組み合わせることにより、伊藤が意図的に西洋の立場からの東洋の魅力を強調する演出に仕立てている。かつて渡米した直後の伊藤は、ヨーロッパよりもやや遅れて米国に流入したジャポニズムの洗礼を受けており、この経験がアメリカを中心とした連合国軍の好みや期待を十分理解した日本側の独自の演出方法として兵士たちに十分受け入れられ、結果的に舞台の成功につながったことが窺える。特に図19のような白と黒の対照的な色やデザインの衣装に身を包んだ2つの女性群像は、戦後日本社会に生み出された良女と悪女という新たな女性イメージを表象している²⁵。

その一方で、「ラブソディー・イン・ブルー」や「タバスコ」は、本場アメリカのジャズ・ナンバーや斬新なラテンのリズムを巧みに取り入れ、キレの良いリズムと息のあった群舞が見せ場となる。演博収蔵の伊藤道郎が愛用した多くの舞台製作サブノートには、細かなリズムパターンや舞踊のフォーメーション、衣装、舞台装置のアイディアなどの図が細かく書き込まれているのだが、そうした伊藤自身の音楽的センスや独自の造形感覚が十分に反映されたのがこれらの作品である。「タバスコ」は新聞の劇評にも取り上げられ、その後アーニー・パイル劇場を離れて日本劇場や国際劇場でも公演されるほど話題を呼んだ作品であった²⁶。

そして、東西の2つの交差する視線の結節点と捉えられるのが「ジャングル・ドラム」であろう。伊藤熹朔による東南アジアの鬱蒼と茂るジャングルをイメージした舞台美術を背景に、タイ

舞踊やジャワ舞踊の要素が盛り込まれたこの作品は、伊藤道郎の演出力が話題となり、「終戦後最大のレビュー」と賞賛された²⁷。

舞台の構成・演出、振付、そして舞踊団員の育成はもちろん、照明、衣装、舞台装置に至るまで、米国時代からすべて伊藤道郎自身がこれらに積極的に携わり、ミュージカルをはじめとするステージ・ショウの本場での舞台実践を積み重ね、大小の劇場の裏表を知り尽くしていたからこそ、外国人観客が日本に対して抱く虚像、つまり「伝統的」かつ「モダンで洗練された豊かな文化」と同時に共存する敗戦国日本への「エキゾティックな視線」が浮き彫りにされ、東西の視線が交錯する舞台空間で「日本」イメージを構築したといえよう。

3-2 アーニー・パイル劇場と戦後日本社会との接触

最後に、一般の日本人との接触が可能となったアーニー・パイル劇場における交流事業に少し触れてみたい。“オフリミット”と言われた日本人禁制の劇場であったが、今回の NARA 収蔵の写真記録の調査を通して、音楽会をはじめとする各種行事のほか、クリスマス行事や子供のためのフェスティバル、日本の小学生とアメリカン・スクール生とのクリスマス行事を通じた交流会などがアーニー・パイル劇場大劇場において幾度となく実施されていたことが明らかとなった(図23)。その多くは日本の子供たちに対する教育的な配慮からの日米文化交流事業であったことが予想される。

おわりに

本稿では、占領期における演劇空間の空白の歴史を埋めるべく、米国国立公文書館収蔵の写真資料等を手がかりに、アーニー・パイル劇場において主に伊藤道郎が構成演出や振付に携わった「日本物ショウ」、および専属舞踊団「アーニー・パイル・ダンシングチーム」が出演した舞台公演を写真資料から概観した。特に米国国立公文書館が所蔵する占領期の写真資料を中心に検討したところ、伊藤道郎と専属舞踊団が雇用された1946年から経営上の問題で専属舞踊団が解散した1947年までの間、特に伊藤および専属舞踊団の活動が積極的に評価された時期に集中して写真資料が残っていることが明らかになった。

占領期の舞台公演の様子を伝える映像資料や音声資料は非常に少ない²⁸。戦後日本の大衆文化の展開を見る上で、誰にでもアクセスが可能な NARA の記録写真の存在は重要かつ貴重である。アーニー・パイル劇場のさらなる実態の把握にとって、記録としての舞踊写真の価値付けや分析方法の確立とともに、日本においても自由に利用が可能なアーカイブの構築が急務である。

【謝辞】

本稿の執筆にあたり、カリフォルニア大学アーバイン校 Tara Rodman 氏に資料の詳細に関してご教示いただきました。また資料の調査の際には、米国国立公文書館の Holly Reed 氏、Sharon Culley 氏、Kaitlyn Crain Enriquez 氏に多大なるご協力を賜りました。また、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館にも資料を閲覧させていただきました。改めて感謝を申し上げます。

注

- 1 桑原規子「アーニー・パイル劇場をめぐる美術家たち」『聖徳大学研究紀要 人文学部』18号、2007年12月。
- 2 桑原規子「アーニー・パイル劇場をめぐる美術家たち」『近代舞台美術に関する視覚文化的研究』平成17～19年度科学研究費補助金（基盤研究B）研究成果報告書（研究代表者・五十殿利治）、2008年3月。
- 3 桑原規子「駐留軍施設における美術展示空間——アーニー・パイル劇場と陸軍教育センター——」『近代画説』23号、2014年12月。
- 4 桑原前掲注2、94～95頁。
- 5 資料のデジタル化のため、伊藤道郎関連資料のうちアーニー・パイル劇場に関する資料などが現在は閲覧禁止となっており、2017年9月現在も伊藤道郎関連資料の画像データベースはほとんどが未公開である。なお伊藤道郎の資料は「千田是也文庫」（ノート・資料類）の一部として分類され、その内容は写真アルバム、スクラップブック、直筆原稿、劇場内文書、プログラム類、スケッチ類、舞台サブノート、書簡など多岐にわたる。
- 6 俳優で演出家の千田是也は、劇団俳優座および俳優座劇場創設者で、伊藤道郎の実弟である。またアーニー・パイル劇場で舞台装置を担当した伊藤熹朔も伊藤道郎の実弟、千田是也の実兄である。
- 7 「千田是也文庫」（ノート・資料類）J1、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館収蔵。
- 8 以下の文献に舞台写真が掲載されており、これらを手掛かりに公演演目が特定できる。藤田富士男『伊藤道郎・世界を舞う——太陽の劇場をめざして——』武蔵野書房、1992年。斎藤憐『アーニー・パイル劇場——GIを慰安したレビューガール——』ブロンズ新社、1998年。伊藤熹朔『舞台美術』朝日新聞社、1963年。俳優座劇場編『伊藤熹朔 舞台美術の巨人』NHK出版、2014年。
- 9 仲本和彦、沖縄県文化振興会公文書管理部「在米国沖縄関係資料調査収集活動報告Ⅱ——米国国立公文書館新館所蔵の映像・音声資料編——」『沖縄県公文書館研究紀要』9号、2007年3月、18頁。
- 10 仲本前掲注、19頁。
- 11 本稿の掲載写真は、筆者がNARAで撮影したものである。
- 12 「アーニー・パイル劇場紹介」『音楽之友』4巻8号、1946年8月、17頁。
- 13 久我進「アーニー・パイル劇場に就て」『九州演劇』1947年8月、6頁。
- 14 久我前掲注、6頁。
- 15 中京テレビ「宮本亜門が追跡！アメリカに夢を売った男——空白の昭和芸能史と天才日本人の奇跡——」1996年2月4日放映。
- 16 久我前掲注、6頁。
- 17 「ミカド」に関しては次の論文が詳しい。Tara Rodman, “A more Humane Mikado: Re-envisioning the Nation through Occupation-Era Productions of The Mikado in Japan”, *Theatre Research International*, Vol. 40(3), October 2015.
- 18 久我前掲注、7頁。
- 19 『マッセズ』1号、1946年12月、ページ記載なし。
- 20 久我前掲注、7頁。
- 21 「アーニー・パイル劇場専属舞踊団員募集」『読売新聞』1946年3月30日。
- 22 緒崎勝一郎「アーニー・パイルの踊子たち」『淑女』1巻3号、1948年3月、14頁。
- 23 「千田是也文庫千田是也ノート」J23、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館収蔵。
- 24 伊藤道郎「アーニー・パイル劇場のこと」『日本演劇』5巻7号、1947年10月、41～42頁。
- 25 串田紀代美「交錯する東西の視線——占領期アーニー・パイル劇場における伊藤道郎の演出法——」『音楽文化学論集』5号、2015年3月、127～130頁。

- 26 「タバスコ」『東京新聞』1947年12月19日。
- 27 占領軍調達史編さん委員会編『占領軍調達史——部門編（芸能・需品・管財編）——』1、調達庁総務部総務課、1957年、6頁。
- 28 表1に掲げた公演一覧の演目中、「ミカド」だけが「日本ニュース」戦後編第33号チャプター3「御法度の歌劇“ミカド”上演」で見ることができる。「日本ニュース」は、太平洋戦争を間近に控えた1940年から1951年まで製作されたニュース映画である。現在は、NHK戦争証言アーカイブスのニュース映像に収録されている。http://www2.nhk.or.jp/archives/shogenarchives/jpnews/movie.cgi?das_id=D0001310033_00000&seg_number=004。

